



住みなれた我が家を後に

続けようとしている後継者の結婚にも大きな影響を及ぼした。当然、感情的な問題に発展していったのは言をまたない。部落内の意見も二つに分かれて、重苦しい雰囲気になって来たのであった。

帰郷運動をした人達も又帰郷が実現出来たとしても、現在所有している土地の売却が出来るかの問題、帰郷してからの将来の問題、如何に望郷の念にかられたとしても、過去六〇年心血を注いで開拓して来た土地、自分の天職として汗水を流し努力して築き上げて来た農業を、いざ離農するとなると一抹の淋しさと不安

に、安眠出来ぬ夜もしばしばあったのではないか。

最終的には、栃木部落をはなれて母県へ帰郷したのは、帰郷請願者一三戸のうち六戸であった。

昭和四七年二月二三日部落民、町、農協の関係者をまじえて、栃木公民館に於いて送別会を催した。この時も報道関係者は、この様子取材しようと大挙押しかけて来て場内に入ろうとしたが、部落民が拒否をして場外に締め出す一幕もあった。

同年三月八日、春とは言え寒気のきびしい日、六〇年間喜怒哀楽をともした部落民、六〇年間苦難に耐え築き上げた栃木部落と別れを告げる帰郷者の旅立ちである。部落民多数が公民館に集まり、残る者、行く者共に涙を流しながら送別の挨拶を交す。近親者や近所の人達が遠軽駅まで見送り、遠軽駅



昭和47年3月8日 部落民と別れを惜む帰郷者達

構内より流れる蛍の光の吹奏に送られて、開拓以来、実に半世紀以上に亘る栃木部落での生活に終止符をうつたのである。

(2) 帰郷者の状況

さて、栃木部落を出て母県に帰った帰郷者達はその後どうであったか。栃木県側では、帰郷者対策として家賃の安い住宅を提供して、就職の世話をしようと約束した。

帰郷者達は母県に夢を託して帰郷したが、そこは希望していた渡良瀬川沿いの土地ではなかった。とりあえず壬生町の雇用促進住宅に落ちついたのである。壬生町の雇用住宅に約一年位いて、その後栃木県知事の斡旋で、石橋町下古山にある日産自動車KK所有の土地の分譲を受け住宅を建設する。

仕事は壬生町にある玩具工場や栃木町にあるハム工場等に就職をした。

帰郷運動の主旨通り、栃木県側が受け入れ約束をどのように履行したのか、帰郷者達は多くを語ろうとしない。帰郷して落ちついた土地は、希望していた谷中村周辺の地ではなく、石橋町に帰郷者中四戸が住宅を新築をした。あと二戸は少し離れたところに建売り住宅を求めて、お互いに助け合いながら生活を営んでいる。



帰郷直後 先人の故郷の地に立つ帰郷者達

現地の人達は北海道部落と呼び、帰郷後一〇年を経過した現在、皆が集まれば佐呂間町栃木部落の話が出て来る。やはり自分達の手で苦勞して開拓した土地、人生の半生以上も過した栃木部落は、遠く離れてみれば、帰郷した中年以上の人達にとっては故郷なのであろう。

(3) 帰郷後における栃木部落の影響 と進展

昭和四六年から四七年にかけて、帰郷運動とマスコミの報道により、全国的に世論の注目の的となり、真実と偽報の交差する中で、栃木部落に及ぼした影響は大きかった。後継適齢期の花嫁問題、生活営農意欲の減退、報道に対する不信と部落民の怒り等大きな問題が残された。

部落民は何時でも意気消沈してはいなかった。帰郷問題のマスコミ報道で、全国的に悪い印象で知れ渡った部落を、一日も早く回復をしようと立ち上がったのである。昭和四七年を新生栃木の始まりとして、残った部落民が一致団結、お互いに力を合わせ部落の発展と本當に豊かで住みよい地域を建設しようと誓い合ったのである。

帰郷者達の所有地は、殆んど部落内の人達が引き受け、経営

規模拡大をはかり集団水田転作事業により、乳牛及び大型機械の導入、第三次酪農近代化事業による大型サイの建設、大型トラクター及び作業機械等の導入をはかり、酪農経営の基盤も出来て着々とその成果を挙げつつある。

昭和四五年より始まった道営畑綜事業により、未開地を耕地に改良、栃木道路改修による舗装化（現在一部舗装）更に、国営による三面ブロックリの武士川の改修も間もなく完了する。乳牛の増加による飲用水の確保も、栃木部落の清流を全町にまたがる営農用水として使う事になり、五七年には通水の目途もたち、名実ともに酪農の部落栃木に生れ変わったのである。

マスコミ報道による部落が受けた悪影響も、部落民一人ひとりの努力によって次第にうすれ、部落民の気持ちにも落ちつきと余裕がみられるようになった。

栃木部落開拓の先人達が幾多の苦難に耐えながら、一鍬ひと鍬開墾したが何の娯楽もなく、苦しい開拓に専念した日々の中に、ただ一つ疲れた心をいやす「八木節」を唄い踊たと言う。

この尊い部落の文化、郷土芸能八木節を長く後の世まで保存しようと、開基七〇周年記念事業として、保存会を結成した。開拓先人達の労苦に報ゆるべく努力しており、開拓の守り神として迎えた神社も毎年春秋には祭社する。

日光山多聞寺も壇徒の寄進と部落民の協力により昭和五三年、本堂の大改修と庫裡・納骨堂の新築をした。

栃木部落の中央を仁頃山に向って垂直に伸びる栃木幹線道路、その左右の山々の裾まで、夏ともなれば緑のデントコーン畑や牧草畑が広がり、放牧された乳牛が緑の牧野に散々といるのでかな風景である。広々とした甜菜畑や小麦畑のなかに点々と新しい大型サイロや近代牛舎が見える。

国道三三三三号線より栃木部落の入口に立つと、正面に堂々とした仁頃山がそびえ、部落民を見守っているようにみえる。農村の代表的な僻地過疎の部落と全国に報道されてから一〇年を経た今、部落民の努力により実に豊かで平和な部落である。一戸平均約二〇ヘクタールの耕地を所有する酪農の部落として生れ変わったのである。過剰投資気味であった経営経済も除々に解消し規模拡大の効果も出て来た。農業経営の充実とともに、農家の後継者も次々と定着し部落の将来に大きな望みももてる。

昨今は、牛乳の生産調整、乳価の据置き、資材の高騰等農業をとりまく情勢は誠にきびしいが、このよきな情勢に耐え、部落民一人ひとりが知恵を出し合い、限らない未来への発展に意欲を燃やし、部落民が固い団結のもと懸命の努力をしている。

9、栃木部落開基五〇周年記念事業

明治四四年四月二一日、栃木県から六六戸、二四〇名の入植以来、幾多の苦難を克服しながら五〇年の変遷を経て、昭和三五年四月二一日栃木部落開基五〇周年の輝かしい年を迎えた。

栃木部落においては、入植以来老人の労苦を偲び、今後部落の一層の発展を期するため、栃木部落開基五〇周年記念協賛会（会長・峯崎辰蔵氏）を設立し、記念式典並び祝賀会を挙行することになった。

当時についての詳しい資料が乏しく定かではないが、少ない記録をみると盛大な記念式典・祝賀が催されている。

記念式典については、遠く栃木県より栃木県知事代理・横田新兵氏、宇都宮市下野新聞社・福島社長御夫

妻、小林、石川両特派員の各氏が臨席する。町内では、町長をはじめ議会議員、教育委員会、農会、共済、乳業会社、精糖工場、病院長、郵便局長、小中学校長、営林署等の代表者五〇余名が列席していることからみて、如何に盛大であったか伺い知ることができる。

式典では、栃木県知事横川信夫氏の祝辞、下野新聞社下野会会長坂田惣一氏の激励文の披露があった。この激励文を掲載すると次のようである。

激励文

万花爛漫の北海道佐呂間町栃木部落が、本日入植満五十周年記念式典を挙行致しますことは、遠く離れた故郷の地栃木県百六十万県民の等しく御慶びいたす処であります。

特に、我々下野会員は、郷土を代表する下野新聞に携る県下全域に亘って、各地に販売網を以って有する店主を以って構成して居ります関係から、あなた方のお父さん、お母さん方が、明治四四年四月二十一日に御当地に入植されました当時の模様を克くに存じております。

したがって、吾々郷土人と繋りを持つあなた方、栃木部落の長く久しい間の御苦労に対し、常日頃大きな関心を以って見守って居りました。

茨の道を五十有年の御苦闘に依って、今日この祝典を迎えられました皆様に対し心からなる尊敬の意を表したいと存じます。幸いにもこの祝典に下野新聞社長福島悠峰氏が御招待されますので、社長に托し心ばかりの御祝品を御贈り出来ました事を喜ぶもので御座います。

今後共、どうぞ益々御健闘の上、野州魂の如何なるものであるかを大いに誇示して頂きます様期待いたす

次第で御座います。

皆様の御奮闘は下野新聞に依って、将来も報道されることを確信致しますが、どうぞ永遠に境墓の地をお忘れすることなく交友を続けて頂きたいと念願いたしております。

終りに栃木部落の皆々様の御健康と御多幸を御祈り致します。

昭和三十五年四月二十一日

栃木県宇都宮市池土町三〇〇三番地、下野新聞社内下野会

坂田 惣一郎

外会員一同

栃木部落祝典会長殿

以上のような部落に対しての激励文が寄せられ、更に記念式典祝賀品として次のような品々が寄せられている。

- | | | | |
|---------------|------|--------------|------|
| 一、入植五十周年記念碑題字 | 壱基 | 栃木県知事 | 横川信夫 |
| 一、櫓の木(苗) | 五本 | 三鴨山文化保護委員会代表 | 中山善重 |
| 一、栃の木(苗) | 七本 | 岩舟村林商店 | |
| 一、御神霊 | 壱百拾基 | 日光二荒山神社 | |
| 一、御護摩札 | 壱百拾基 | 日光輪王寺 | |
| 一、御守護札 | 四種類 | 今市市二宮神社 | |

一、家康公訓 壺百拾個 日光東照宮

一、干瓢(一〇メ) 壺梱 宇都宮市下野新聞社

一、干瓢(二六キロ) 壺梱 宇都宮市

一、清酒正宗菰冠り 壺樽 宇都宮市下野会

一、醬酒(二本瓶) 五十本 藤岡町岩崎醬油株式会社

一、本宮羊羹 百本 本宮製菓KK 橋本善英

一、益子焼湯呑 五十個 栃木県陶磁器商工協同組合

そのほかにも絵はがき等数点、栃木県各地から祝賀品が贈られて来ている。

下野幌新聞社と部落の関係については、冷害と救援の主文の中で述べてあるとおり下野新聞社と部落の結びつきは深い。

式典では、協賛会長より開拓功労者の表彰が行われた。表彰を受けられた方々は次の通りである。

瀬下六右衛門、川島平助、小林ヤイ、峯崎ナツ、阿部トメ、田中アキ。

このように、五〇周年式典は盛会裡に終了した。その後、五〇周年の記念事業として「入植者の言葉では言い尽せない労苦を後世に永く伝え、その努力を讃えよう」と、部落の総意により記念碑の建立をしたのである。記念碑の題字は栃木県知事が、碑文は下野新聞社福島社長が書き、立派な記念碑となった。

部落民も五〇周年を期して先人達の労苦を偲び、北海道に「栃木部落あり」の名をあげようと固く誓い合ったのである。

K211.1

栃木のあゆみ

昭和五十七年六月一日発行

発行者 栃木開基開校七〇周年記念協賛会

編集者 栃木部落史編集委員会

発行所 常呂郡佐呂間町字栃木

印刷所 協業組合 高速印刷センター

札幌市西区手稲稲穂四七二―二〇